



TITLE:

<書評>高橋そよ著『沖縄・素潜り
漁師の社会誌 --サンゴ礁資源利用
と島嶼コミュニティの生存基盤』
コモンズ、2018年、3,700円+税、
264頁

AUTHOR(S):

三田, 牧

CITATION:

三田, 牧. <書評>高橋そよ著『沖縄・素潜り漁師の社会誌 --サンゴ礁資源利用と島嶼コミュニティの生存基盤』コモンズ、2018年、3,700円+税、264頁. コンタクト・ゾーン
2019, 11(2019): 457-461

ISSUE DATE:

2019-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/243997>

RIGHT:

高橋そよ著

『沖縄・素潜り漁師の社会誌 ——サンゴ礁資源利用と島嶼コミュニティ の生存基盤』

コモンズ、2018 年、3,700 円＋税、264 頁

三田 牧*

本書は、沖縄県の佐良浜という集落の人々が、海とどのように関わりながら生活し、社会を築いていたかを描く。大学院生だった著者、高橋そよさんが、佐良浜の漁師に弟子入りしながら学んだ知が、生態人類学的方法で、ひとつひとつ丁寧に描かれている。

本書の構成は以下のとおりである。

- 序 章 本書の目的と構成
- 第 1 章 調査地の概要
- 第 2 章 素潜り漁師の自然認識と民俗分類
- 第 3 章 素潜り漁師の漁撈活動—民俗知識とその運用
- 第 4 章 魚が紡ぐ島嶼コミュニティ——「情」の経済と生活戦略
- 第 5 章 見えない自然を生きる——自然観と社会的モラリティ
- 終 章 島嶼コミュニティの生存基盤の理解にむけて

457

本書を読んで、とりわけ印象に残ったのは、宮古の海の豊かさである。佐良浜は、沖縄県の宮古諸島、伊良部島の一集落である。佐良浜漁民は、サンゴ礁が育む豊かな生態系を基盤に漁を行ってきた。宮古の漁民はカツオ漁でも有名であるが、南方でのカツオ漁が 1980 年代より衰退すると、地元での漁業が再び主軸となったという。本書で中心的に取り上げられているのも、サンゴ礁の海を舞台とする素潜り漁である。

「サンゴ礁の海」、つまりサンゴが育つ浅い海域は、海の色が淡く、きらきらとしている。そして、海の中には多種多様な動植物が織りなす色とりどりの世界がある。それは、濃紺の外海とは対照的である。宮古の海には、八重干瀬という広大なサンゴ礁群があり、佐良浜の人にとっても大切な漁場となってきた。

漁師たちが自分の庭のようにサンゴ礁の海の地形や生態環境を熟知していることは、高

*MITA Maki 神戸学院大学

橋さんの研究に先行する研究でも明らかにされてきた〔例えば熊倉 1998；島袋・渡久地 1990；高山 1999；野本 1995〕。本書第2章では、「素潜り漁師の描いた地図」という形でその認識世界が詳らかにされている。漁師にとって有意味なサンゴ礁地形の連続体として描かれたこの大きな地図（模造紙を16枚も継ぎ足したという）は、変わりゆく海洋環境に向きあう漁実践の中で日々形成されてきたものであろう。

また漁師たちは、サンゴ礁の浅い海域にこまやかに地名をつけ、その地名を共有しているが、その中で印象深いエピソードが本書に紹介されていた。

ある素潜り漁師が日暮れになっても港に戻らなかった翌朝、捜索にあたった漁師たちのうち、素潜り漁師の一人は、まっすぐ「イフ」と呼ばれる場所に向かった。「イフ」は八重干瀬の中央に位置し、波浪の影響を受けにくい穏やかな礁池である。そこは、エンジンを導入する前の時代においても、漁師たちが夜を明かす際に利用した場だった。果たして、「遭難」した漁師はそこにいた。エンジンが故障して動けなくなったのだった。驚いたことに、その漁師は、「イフ」に碇をおろし、眠っていたという。そのような避難場が、海の中にあること。そして、その知が共有されていて、「きっと誰かが助けに来てくれる」という安心につながっていること。そのような海の優しさは、サンゴ礁の海ならではのことだ。

評者である私にとって、この海の豊かさや優しさがとりわけ印象深かったのは、私が研究を行ってきた沖縄本島糸満の海との比較からである。1972年の日本復帰以降、沖縄振興開発によって、糸満ではサンゴ礁の海が大規模に埋め立てられていった〔三田 2015〕。糸満の漁師たちが語る「昔の糸満の海」の豊かさは調査時の1990年代後半には既になく、アイゴの稚魚が塊となって到来する光景も、様々な生物の子どもたちを育んだ藻場も、アオリイカの追い込み網漁も、過去のものとして語られていた。しかし宮古の海は今日も豊かであり、本書には到来するアイゴの稚魚の群れも、アオリイカの群れを追う漁師たちの姿も、「そこにあるもの」として描かれている。

同じ沖縄県であっても、沖縄本島にあり那覇にほど近い糸満と、宮古諸島の伊良部島では開発の規模が異なるだろう。本書では伊良部島においても沖縄振興開発によって港湾整備や埋め立てが行われたと指摘しているが、糸満が失った海の豊かさを、宮古が保ち得た社会・政治的背景は、沖縄の漁撈社会を歴史的に眺めるうえで重要ではないか。

本書の特徴の一つは、研究手法である生態人類学的方法にある。生態人類学的研究では、人間の活動が「生態」として記録される。それがよく表れているのが、第3章の「素潜り漁師の漁撈活動」である。中でも、著者が参与観察した、アオリイカの追い込み網漁の記述はおもしろかった。

漁師の一人が海に飛び込み、アオリイカの群れを発見する。他の漁師たちが網を持ち、アオリイカを追い込む。この時は、わずか数分で、アオリイカを5キログラムも捕獲した。しかし、そのあと複数の漁場でアオリイカを探すも、見つけれられない。この記述を読み進める中で、私はいつのまにか、アオリイカが漁師に見つからず、うまく逃げおおせることを願っていることに気がついた。素潜りをしている人間もイカも、同じ生き物であ

る。それは、捕食者が獲物を探し求める狩猟の情景そのものであり、力の弱い被捕食者に私は共感してしまったようである。

漁師の一人が、海面に渦を見つけ、注意を促す。それは海中の潮の流れが速いことを示していて、漁師たちは漁場を変える。海は、この場合、捕食者（人間）にとって危険な環境であり、被捕食者（イカ）にとってはそうではない。やがて潮が満ちはじめ、アオリイカたちが外海に移動し始めると、漁師たちは、アオリイカ漁をあきらめ、他の漁法に切り替える。イカに肩入れして記述を読んでいた私は、ここでイカたちの勝利（逃げおおせたこと）をよろこんだ。

著者はそんな漁撈を「不確実な生業活動」と呼び、その不確実性を乗り越えるため、漁師たちは魚の生態や習性、生息場所となる地形の分布、漁場空間の自然現象などについて民俗知識を駆使し、状況によって瞬時に漁法を切り替えていると指摘する。海洋生物と人間のバトルは、日々海の上で繰り広げられている。それに勝ち、生活の糧を十分に得るためには、人間の側に相当な知とそれに裏打ちされた判断力という「装備」が必要ということだ。

本書第4章では、社会の側から漁撈活動を眺めている。具体的には、「ウキジュ」と呼ばれる漁師と仲買の契約関係をめぐる記述である。ここでもまた私は糸満の過去に思いを馳せた。ウキジュとは、本来魚の「受け手」のことで、漁師Aのウキジュに仲買Bがなったならば、Aの獲った魚はBが全て受けねばならないし、AはBに漁獲を全て売らなければならない。それは糸満でもかつてはあったが、1957年にセリが導入されて以来、その慣行は徐々に失われていった。

一方、本書によると、伊良部島の佐良浜にはセリがないという。1978年頃セリの導入が試みられたが、数日で取りやめになったらしい。一体なぜなのか。著者である高橋さんが漁師に聞くと、網漁など潮の満ち引きに応じた漁法はセリのスケジュールに馴染まないことや、売れ残る魚が出ることが理由であると言う。また、仲買に聞くと、入札権を買うことのできない仲買が少なからずいたことや、仲買同士の譲り合いから「競り」にならなかったことなどを理由として挙げたという。しかし著者はそれだけではないと考え、その理由をウキジュという慣行（本書では、ウキジュを漁師と仲買の関係を示す言葉としても使っている）の社会にとっての合理性に求める。それは、簡単に言えば個と個の信頼によって成り立つ互酬的關係である。

この関係において、漁師は全ての漁獲を仲買に買い取ってもらえるが、仲買が支払う魚の値段にクレームをつけることはできない。また、仲買は、自分がウキジュとなっている漁師の漁獲を全て入手できるものの、漁師が獲ってくる魚の種類を指示することができない。このような一見問題が起きそうな関係性を支えているのが、互いの信頼である。仲買は漁師に不満が出ないような値段をつけ、漁師は仲買が欲しい魚が何であるかを気にかける。そのような思いやりを形として表すのが、「ツムカギ」であると著者は言う。ツム（心）・カギ（美しい）というこの言葉が示すのは、この場合は、仲買が漁師に支払う「おまけ」のことだ。それは、魚代を支払う時に端数が出ないよう、少し多めに支払うこ

とでもたらされる。また、儀礼の際の差し入れなどの形をとることもある。

仲買は漁師が不漁であれば入手できる魚も少なくなるが、複数の漁師のウキジュになったり、島外からも魚を入手したりすることでリスクを減らし、また、魚の種類にもヴァリエーションを持たせる。また、仲買同士の間にも「自分ばかりが儲けられない」という規範意識があり、ゆるやかな協力関係が見られるという。

佐良浜の社会関係は、このような互いへの信頼によって結果的に安定したものとなり、合理的に機能している、というのが著者の結論である。

最後に、著者は超自然的存在が支える規範意識を問題にする。第5章で取り上げられるのは、マジムヌという霊的な存在を畏怖して、ある漁場を特定の時期に忌避する漁師の行動や、マジムヌを祓う儀礼である。

実際に漁師が海で禁忌を破った時にマジムヌに遭遇したという事例がおもしろい。「海の只中にあるサンゴ礁の上でヤギが眠っていた」、というようなエピソードの中に、海の世界の底知れない広がりを感じる。本書では、この禁忌に基づく行動が、漁場へのアクセスに制限をもたらすとし、資源の面から見た合理性を示唆している。

禁忌といえば、糸満では、女性が海に行くことは禁忌であり、私が網漁の見学にサバニ（舟）に乗せてもらった時は、その家のおばあさんが実はいやがっていたと後で聞いた。一方で、はえ縄漁に連れて行ってもらった漁師さんのご家族は快く受け止めてくれた。このような慣行や信仰については考え方に個人差がかなりあるように感じる。

本書で著者が指摘しているように、禁忌とされている漁場に行ってみる者が少なからずあることは、佐良浜でもこのような存在を受け止める態度は様々であることを示している。禁忌は破られたり、あるいはその必要性が確かめられたりしながら、あいまいに、生活の傍らにあるのだろう。ちなみに、佐良浜では女性を船に乗せることは禁忌ではないのだろうか。女性である著者、高橋さんが漁師と共に海に出ることを、島の人たちはどのように受け止めていたか、少し気になるところである。

本書を通して著者は、島嶼コミュニティ全体に目を配りながら、人間による資源利用の在り方を記述しようとした。すなわち、素潜り漁師のサンゴ礁資源利用を、漁師の知識や漁行動だけではなく、それを支える社会関係や経済関係や信仰が分かťことなく絡み合った総体として記述しようとしたことになる。その結果、佐良浜の社会と海をひとつの調和的世界として説得的に描き出していると思う。

その一方で、佐良浜、宮古諸島、沖縄県、日本、と視点を国境に沿って広げていった場合に見えるはずの「大きな文脈」はあまり出てこない。あるいは生態人類学的関心としては、「サンゴ礁の海」というキーワードに依って、より南の海に文脈を広げていくことになるのだろうか。

人間を生態学的にとらえようとする生態人類学において、歴史が議論の対象になることはあまりない。しかし、沖縄やサンゴ礁の海の広がる島嶼地域の決して少なくはない場所で、日本はその社会の歴史に深く関与してきた。

そんな地域で研究をしている高橋さんも私も、常に自分が何者であり、どのようにその地域に関与していくかを考えざるを得ないと思う。「あとがき」に高橋さんが書いている、伊良部島における漁師たちの文化や歴史の継承活動への参与は、その答えのひとつだろうか。

<参考文献>

- 熊倉文子 1998 「海を歩く女たち——沖縄県久高島における海浜採集活動」篠原徹（編著）『民俗の技術』朝倉書店、pp.192-216。
- 島袋伸三・渡久地健 1990 「イノーの地形と地名」『民俗文化』2：243-263。
- 高山佳子 1999 「伊良部島の海浜採集活動」『動物考古学』13：33-71。
- 野本寛一 1995 『海岸環境民俗論』白水社。
- 三田牧 2015 『海を読み、魚を語る——沖縄県糸満における海の記憶の民族誌』コモンズ。